考える力を伸ばす授業実践

－主題学習を組み込んだ年間指導計画を通して－

○○○○高等学校　○○　○○(世界史)

１　はじめに

世界史 B を担当する時，最初に「世界史という教科のイメージはどんな感じ？興味はありますか？」と問いかける。教壇からは生徒の様々な表情が伺える。異なる表情の生徒を数名指名すると概ね表情のとおりのイメージを答えてくれる。ここ数年，多くなってきているのは「興味はあるけど暗記は苦手。」「教科書が分厚いから，本当に覚えることが多そう。」「歴史は好きだけど，日本史の方が好き。」といった回答である。興味はあるようだが，何らかの抵抗感があるようだ。同じ学習時間をとるなら，興味をもってわくわくしながら未知の知識を習得して欲しいと考える。「生徒が抱いた興味をさらに探究したいという意欲に結びつける方策はないか。また探究意欲を調べ学習に結びつけられないか。」この二点に主眼をおいて主体的に学習する手段をいろいろ試行してきた。本研究はこの方向性に立ったものである。

本校はまもなく創立 60 周年を迎える高等学校である。行事や部活動が盛んで落ち着いた学習活動が行われている。本校でさらに生徒の学力を伸ばすにはどうしたらいいか，という点が当面の課題である。

本校生徒に世界史授業アンケートを行った結果は以下の通りである。授業に対して概ね前向きに取り組み，知的好奇心が高い生徒はかなりいる。しかし，復習をしてさらに理解を深めようという生徒は少ない。講義形式に対して 8 割強の生徒が「このままで良い」としている。また 2 割弱の生徒は「つまらない」，「退屈」と回答している。講義形式で良いと答える生徒の本音は「考える作業が面倒くさい」という消極的理由であり，退屈という生徒は「話を聞き板書を写す作業がつまらない」と理由を提示している。反面，物事について自分で考え・まとめ・表現する能力を身につけたいと考えている生徒は多い。ここから現状では「受け身がちである生徒達が興味を持ち，調べ，考えようとする授業」を作っていくことが大きな課題となってくる。

２　主題の設定

受身がちの生徒に興味を持たせ調べ考えさせる授業を作っていく上で，いろいろな手法を検討したが，これまでの取り組みの中で，生徒が比較的興味を示すのが絵画や写真を提示した時であった。文字資料とともに歴史的事実を知る拠り所となる写真や絵画や映像といった資料は生徒にとっても具体的なイメージを膨らませる大事な手掛かりとなる。その手掛かりをもとに生徒自身がいろいろな事実を調べ，意味や価値に気付くことは歴史に向き合う姿勢を身につける第一歩になると考える。これまでの私の取り組みでは教員側の意図を押しつけてしまうことが多かったので，生徒自身が調べ考える時間を十分に取り，絵画や写真資料から見えてくる歴史的事実を追究させるという方向性を打ち出し，「考える力を伸ばす授業実践」というテーマを設定した。平成 21 年 3 月告示の新学習指導要領 世界史 B　２内容 (４)諸地域世界の結合と変容 オ「資料から読み解く歴史の世界」の項目に「主題を設定し，その時代の資料を選択して，資料の内容をまとめたり，その意図やねらいを推測したり，資料への疑問を提起したりするなどの活動を通して，資料を多面的・多角的に考察し，よみとく技能を習得させる。」とあ

る。今回の取り組みは「資料の意図・ねらいの推測，資料への疑問提起，多面的・多角的考察，よみとく技能の習得」を目指す学習指導要領の趣旨と合致するものと考える。年間を通して主題学習を計画的に組み込むことにより，生徒が「①絵画･写真資料が語る歴史的な事実を読み取る能力をどれだけ高めることが出来るのか。」「②読み取った事実をもとに時代背景や事象・価値観等の理解を深める考察がどれだけ出来るか。」の二点について検証する。

３　実践方法・計画

生徒の実情を考慮すると，まず調べることや考えさせることに慣れていない点が目立つので，「話し合いをしながら答えや考え方をまとめ，発表する」と「レポートを作成する」という単純な手法が一番であると考えた。この取り組みは私自身がこれまで授業であまり行ってこなかったものなので，今後の授業のバリエーションを増やす上でも必要なことだと考える。このような考えに基づき，A.絵画や写真についての話し合い，発表の学習，B.絵画や写真についての調べ学習の二つの取り組みを計画した。

A．絵画や写真についての話し合い，発表の学習(１学期に準備・２学期に本格的に実施)

授業展開の中で，学習内容に関連する絵画・写真資料を提示し以下の活動を行い，当該事項への理解を深める学習を実施する。

・学習の流れ

①絵画を見る	タイトル以外の予備知識を持たずによく見る。
②絵画への疑問	おかしな場所・気になる場所・興味をもった場所をグループごとにまとめる。
③絵画の情報	書かれた年代や地域の情報を与える。
④情報集め作業	グループ(自分)で疑問について調べ，考えをまとめる。
⑤発表	グループ作業なら全グループの代表が，各自で取り組むなら４・５人が発表する。
⑥時代背景の理解	発表を受け，絵画資料のもつ歴史的な価値を考える。
⑦後世への影響	後世にどのような影響を及ぼし，どのような評価を受けたかを考える。

B．絵画や写真についての調べ学習（５月～９月）

生徒自身が自分で気になる絵画や写真をピックアップし，調べ，まとめ，発表する作業学習を実施する。夏季休業中に課題としてまとめさせ，２学期に文化祭を活用して企画発表し，各教室に展示する。内容的によくまとめられているものを生徒の投票によって決定し，発表の機会を設ける。調べる対象が与えられたものではなく，自分が興味をもったものなのでより深く調べることと，各自の個性がまとめの中に現れるようになることを期待する取り組みである。

年間指導計画の中には以下のように組み込んだ。

○年間指導計画		○実践内容	
1学期	導入　世界史への扉 プロローグ 先史時代～歴史時代へ 第１章　古代オリエント・地中海世界 第２章　南アジア世界 第３章　東アジア世界 第４章　イスラム世界の形成	→実践①なぜ描かれたのか →実践②彫刻・絵画が語るもの →実践③モスクが語るイスラム文化	A A A
夏休み	夏季課題　絵画･写真を調べる	→実践④絵画・写真を調べる 絵画や写真は教科書から任意に選ぶ 2学期あたまにまとめ・発表	B
2学期	第５章　ヨーロッパ世界の形成 第６章　モンゴル帝国の時代 第７章　ヨーロッパの変容 第８章　絶対王政と国際関係の形成 第９章　市民革命の時代	→実践⑤地図から見る「発見」 →実践⑥肖像画から見る「人物」 →実践⑦絵画・音楽からみる 1830 年の革命	A A A
	第 10 章　世界市場の形成とアジア諸国		

３学期	第 11 章　帝国主義とアジアの苦悩 第 12 章　二度の世界大戦 第 13 章　20 世紀後半 エピローグ　21 世紀　これから	→実践⑧マスコミと「風刺画」	A

A．の実践は通年実施できるが，生徒は話し合いに慣れていない。そこで１学期の学習の中で，絵画や彫刻作品を用いた授業を３回実施してウォーミングアップとした。本稿では，話し合いや発表に慣れてきた２学期に本格的に実施した内容について報告する。他は概要の紹介のみに留める。

B．の実践は１学期に準備指導を行った上で夏季休業中をメインにレポートを作成し，２学期に展示と発表の作業を行う。時間的にこの時期(夏期休業前後)と冬季休業前後にも実施できるが，今回は夏の取り組みについて報告する。

Ａ・Ｂ両方の取組についての評価方法であるが，ともに「提出されたもの」，「話し合いの取組姿勢」，「発表の様子・聞く態度」等を加味して平常点に加えるという形にする。A．については定期考査でも知識の定着度を測ることができるが，答えを導く過程の話し合いや調べる作業の方に重点を置くため，このような形にした。

４　授業実践の具体的様相

A．絵画や写真についての話し合い，発表の学習

年間指導計画の中に実践①②③⑤⑥⑦⑧の７回を組み込んだ。概略を以下に示す。

①なぜ描かれたのか‥‥「アルタミラ・ラスコー洞穴壁画」の写真を 10 枚使用し，どのような環境で何のために描かれたのかを考えさせた。ランダムにグループを組み，ヒントを提示しながら答えをたくさん出させるように工夫した。

②彫刻・絵画が語るもの‥‥ギリシアの彫刻，ガンダーラ地方の仏像，中央アジア各地の石仏，中国の仏像，朝鮮半島の仏像，カンボジアの仏像等を提示し，いつ頃作られたものなのか調べ，それぞれの像の顔や服装の特徴を比較し，シルクロード・海の道の存在を考えさせた。

③モスクが語るイスラム文化‥‥イスラム教が広まった各地のモスク建築の写真を提示しモスクの共通点やそれぞれの地域の特徴についての話し合いをさせ，「イスラム文化の共通性と多様性」の理解を深めさせた。

⑤地図から見る「発見」・⑥肖像画から見る「人物」‥‥本稿で報告

⑦絵画・音楽からみる 1830 年の革命‥‥ドラクロワの絵画やポーランドの絵画など数枚の提示とショパンのエチュード「革命」「大洋」の鑑賞を通して，1830 年の革命によって表面化した国民主義が当時の人々にどのように定着していったのかを考えさせた。

⑧マスコミと「風刺画」‥‥世界各国で描かれた風刺画を通して社会風潮を形成していったマスコミや政府のあり方，視点の違いや情報を鵜呑みにする危険性を考えさせた。

１学期は話し合いの足がかりを作る事を主眼とし，B．絵画や写真についての調べ学習(実践④)の後，絵画資料を使った話し合いを本格的に実施したので，本稿では２学期に行った実践⑤・⑥について検証する。

実践⑤　地図から見る「発見」

〇指導目標　大航海時代に関する基本事項を学習するとともに，様々な絵画を通じてヨーロッパの側の発見がどのような形であらわれているか考察し，理解を深めさせる。

○指導案

	学習内容	生徒の活動	備考	時間
導入	・ 中世までの世界の認識 ・資料①大地の姿②ＴＯ図	・資料プリントを見て，この絵がどのような意味を持ったのか考える。	・図について簡単な発問をする。	3 分
展開1	・資料③ベハイムと地球儀 ・大地球体説の認知 ・コロンブスのアメリカ到達	・15 世紀末の世界認識の変化の様子が地球儀という新たな地図の形であらわれていることに気付くとともに，当時の社会情勢を理解する。	・人物像・手にしているものについての発問をする。	15 分
展開2	・ポルトガルのアフリカ南下とインドへの道 ・資料④プトレマイオスの世界地図 ・資料⑤マルテルスの地図	・現在の地図と 2 枚の地図を比較し，異なる点を調べる。またなぜそのような状況となったのか，相談しながら考えをまとめ発表する。	・相談しまとめる時間を十分とり，発表は各グループごとに代表者に行わせる。	15 分
展開3	・発表内容をもとに ・アフリカ西岸とインド・東南アジアについて ・アジアの海のネットワーク 　イスラム商人の海・鄭和の南海遠征	・ポルトガルの探検により，南回りインド航路が開拓されたことを理解するとともに，インド航路の発見ではなく，ヨーロッパの側がアジアの海のネットワークへの参入した事実にも目を向ける。	・様々な意見をうまく組み合わせてポルトガルの探検の結果が，資料⑤にあらわれていることに気付かせる。	15 分
まとめ	・ヨーロッパ側の地理上認識拡大の時代＝「大航海時代」 ・予告　大西洋横断と太平洋横断 　資料⑥コロンブスの航海図 　　⑦オルテリウスの地図	・「大航海時代」「地理上の発見」とはヨーロッパの人々の立場からの言葉であることを理解する。 ・今回学習した地球儀が完成するための発見について興味を抱く。		2 分

○使用した資料

資料①大地の姿

資料② TO 図

資料③ベハイムと地球儀

資料④プトレマイオスの世界地図

資料⑤マルテルスの地図

資料⑥コロンブスの航海図

資料⑦オルテリウスの地図

生徒各自にこれらの図を１枚のプリントにして配布するとともに，話し合いの際には大きなカラー画像をグループ(１クラス８グループ)ごとに配布して使用した。インターネット上で簡単に探すことが出来るポピュラーな画像である。これらを組み合わせてみることで，生徒が「15 世紀末に世界認識が目に見える形で変容した様子」に気付くことを期待して選んだものである。以下に教員の指示と生徒の反応をまとめてみる。

○導入　資料①大地の姿・資料② TO 図の提示

資料①と②はこれまでの授業を振り返って，15 世紀初めの段階での世界認識を示すものとして紹介。生徒は興味深げに眺めていた。TO 図については十字軍でも少し触れていたので覚えていた。

○展開１　資料③の提示　　(※文中の『　』内の部分は教員の発問・提示である。)

資料③「マルティンベハイムの地球儀」については『どのような人物か？右手を置いてい

るものは何か？いつ頃のものなのか？』という発問をした。生徒は５人(都合により４・６人)の班ごとに机を向かい合わせていろいろ調べるが，教科書や資料集にも答えはのっていないので，絵から読み取れる情報から推理している。

☆班ごとの意見　「地球儀を持っているのは分かる。」「大地が丸いと証明されてからじゃないとこんなのは作れない。」「タイツ姿で派手な装飾を施した服装。資料集に載っている人物の姿っぽい。」

推測はおおむね正しいことを伝え，マルティンベハイムについての紹介を行い，次の情報を与える。『ドイツ人である彼はポルトガルに赴きいろいろな話を聞く。地球儀は故郷ニュルンベルク市の依頼で，1491 ～ 93 年頃に製作されたものである。』

この情報を与えたあと『地球が丸いと証明されたのはいつ頃だろうか？』と発問。生徒は教科書や資料集を読み，コロンブスやマゼランの名前を挙げた。事実として誤りがないので次の説明をし，必要事項を板書した。『1493 年頃にはこの世界の真実の姿に気付き始めていた人がいる証拠になるが，一方で宗教裁判や魔女狩りや 17 世紀前半のガリレオの異端審問の事件など，新事実が信仰の立場から否定されていた実情もあり，この地球儀が予想以上に深い意味を持っている。』この地球儀が作られた頃にどのような発見があったのか調べるという流れで，次の展開に移る。

○展開２　資料④・⑤の提示

資料④と⑤の２枚の地図を配布し，よく比較するよう指示をする。『現在の地図と比較して，大まかな地域は分かりますか？２枚の地図に共通するところ，明らかに違うところはどこですか？ 資料⑤の地図で一番気になるところはどこですか？ 』(詳細に描かれている写真パネル(山川出版社)を黒板に掲示)と発問した。生徒はじっくり資料の地図と教科書表紙裏の世界地図と見比べ，相談しながら場所のあたりをつけた。話し合った結果を，班ごとに代表者に発表させ，ポイントになる意見を簡潔に黒板に記した。

☆班ごとの意見　「両方とも，ヨーロッパとアラビア半島？らしい場所は分かるけど，アフリカ？の形が変。」「⑤の地図には東南アジア？インド？あたりの半島の部分らしいのがあるけど，位置的におかしい。」「⑤の地図のアフリカの東側の形が変。ナイル川や他の川の流れが結構細かく書かれている。」「アフリカの西側は正確じゃないけど，だいたいあっている。びっしり地名が書かれているし。」

これらの意見はかなり正確に事実を読み取っているものである。これを受けて資料④⑤について説明するとともに新たな発問をする。『④は２世紀頃に描かれたもので，アフリカは地図の南側全部にまたがっていて，アジアの果ての方でつながっています。これは資料①や②に描かれている世界観に近いものだと考えます。⑤の方は形は変だけど，アフリカの南が描かれています。では，なぜアフリカの東側は適当で，西側はそこそこの情報が書かれているのでしょうか？またインドや東南アジアの半島らしいものの形。この 2 点について考えてください。』教科書と資料集の該当ページを指示。生徒は特に資料集の年表に注目して，いろいろな事実に気付いた。時間をとり，班ごとに意見をまとめさせ発表させた。

☆班ごとの意見　「ポルトガルがアフリカを探検している。地名が多いのは海岸線の情報を調べていたからか？」「バルトロメウ＝ディアスがアフリカ最南端に到達している。」「バスコ=ダ＝ガマが喜望峰を回ってインドに到達している」「インドは思ったより近かったから，⑤の地図のアフリカの南とインドや東南アジアの南が近づいているのかも。」

これらの考えは地図の情報と年表をリンクさせているもので，核心を突いているものである。次に『アフリカの東側が西側に比べて簡略化されている理由はどうでしょう。また，なぜ西側は詳細なのでしょうか？』と新たな発問をした。生徒は推理のために資料集の地図をながめながら意見を出し合っていた。班ごとに意見を発表させたが，考えてみたけれどわか

らないという意見がほとんどで，地図の情報について「バスコ＝ダ＝ガマの航路を見ると東海岸には４カ所しか立ち寄っていないからじゃない？」と答える班があった。西側が詳細な理由には思い至らないようなので，私の意見を伝える。『西側の探検の時点で，海には果てがあり，陸が見えないと不安(当時の常識・今から見れば迷信)だから，陸に沿って移動していったからではないか。そして，最終的にディアスさんは喜望峰に到達できたと思う。』これに対して生徒の側からの異論は特に出なかった。そこで次の発問をした。『では，どうして，４カ所の寄港地のみでインドに行けたのかという疑問が沸きませんか？イスラム世界の学習で触れた，海のネットワークの話を思い出してください。』生徒はノートを見返すが，インド洋にイスラム商人のネットワークが成立していたこととガマの航路開拓を結びつけることは出来なかった。そこでバスコ＝ダ＝ガマのナビゲーターとなったイスラム商人の話とイスラムの海のネットワークの存在と季節風を利用した航路について板書し，謎解きを終えて，まとめに移った。

〇まとめ

次の内容を説明し簡潔に板書した。『ポルトガル人がインドに到達する航路を開拓したのではなく，アフリカの南端があることに気づいた。そこから先にあったイスラム世界の商業ネットワークの恩恵にあずかってインドに辿り着いた。つまり，イスラム（オスマン帝国）の海となった地中海を離れ新たな航路を探したが，イスラムの手助けが無ければインドに行けなかったという皮肉な「発見」であったということになる。あくまでもヨーロッパ側から見た発見に過ぎない。』この説明を聞いた生徒には納得をしめす者が少なくなかった。最後に，コロンブスの航海図(資料⑥)とその後のミュンステルの地図(山川の写真集)とオルテリウスの地図(資料⑦)を提示して次回の予告を行った。

〇検証

７枚の絵(地図)や資料集などをよく見ており，雑談も混じりながらだが答えを自分たちなりに探す作業が成立していた。一学期の実践①②③の時よりもきちんと考えを出す姿勢がみられるとともに，出された意見も的を外れたものではなく，核心に迫るものとなっていた。これは発展的に取り組んできた成果と考える。生徒側の手応えが次の意見抜粋から伺える。

●生徒意見の抜粋(試験の際,解答用紙の裏に書いてもらったものから)
「推理しながら考えるのは楽しかった。」「地図の答えを教科書の中から探すのは今までやってなくておもしろかった。」「日本が ZPANGRI と書かれて地図に載っていたことや，南極やオーストラリアがどこにもないのが印象的だった。」「世界の国や地域の理解が不十分なので，今ひとつピンとこなかった」 「他の地域ではどんな地図が作られているのか気になった。」 「難しかった。」

いろいろな意見が出たが，肯定的に受けてくれた生徒が６割近くである。まだ推理して答えを探していくのは難しいようで，もっと素朴な疑問が出やすい資料，いろいろな意見が出やすい資料を探すことや話し合いの進め方など工夫する点が多々ある。

検証内容であるが「①絵画･写真資料が語る歴史的な事実を読み取る能力をどれだけ高めることが出来るのか。」については，情報を読み取ろうと向き合っている生徒が多かった。工夫次第でもっと生徒自身に考えさせることができると考える。「②読み取った事実をもとに，時代背景や事象・価値観等の理解を深める考察がどれだけ出来るか。」については，教員側がヒントを出しながらではあるが，段階をおって地図の背景を理解することが出来た。教員の説明はあくまで補足的なものにとどめ，生徒が話し合いながら考えをまとめることが出来たのは大きな収穫であった。夏季休業中にレポート作成を行った(P ９で紹介)ので，今回の学習にその手法を取り入れ，学習内容に関連する他の資料を探しまとめる作業学習を課す発展的な指導も可能である。

実践⑥　肖像画から見る「人物」

○指導目標

イギリスのエリザベス１世の肖像画を通じて，女王の人物像や業績を理解させるとともに，絶対王政の特徴を理解させる。特に資料をよく見て考える活動に重点を置いて行う。

○指導案

	学習内容	生徒の活動	備考	時間
導入	・資料①②③④の提示 エリザベス１世像	・資料プリントを見て，この肖像画が誰なのか調べる。	・数人を指名して，発表させる。	8 分
展開1	・エリザベス１世の治世 ・宗教問題・重商主義政策 →なぜ，豊かになったのか。	・説明を聞き，必要事項をノートにまとめる。なぜイギリスが豊かになっていったのか考える。		15 分
展開2	・女王と海賊 ・資料⑤⑥⑦⑧の提示 ・私掠許可状･ドレイクの出世	・イギリスの発展に貢献した海賊と女王の関係について資料を通じて考え，理解する。	・各自で調べ，数名に発言させる。	15 分
展開3	・資料⑨の提示 ・アルマダ海戦→英海外進出 ・エリザベス１世像の再確認	・海外に進出し植民地大国になっていくイギリスのルーツになっていることを資料から読み取り理解する。	・各自で調べ，数名に発言させる。	10 分
まとめ	・肖像画や絵画から見るエリザベス１世像 ・「私は国家と結婚している」	・エリザベス 1 世とイギリス絶対王政についてまとめる。		2 分

○使用した資料

資料① 13 歳

資料② 25 歳(戴冠式)

資料③ 38 歳(不死鳥)

資料④ 56 歳(虹)

資料⑤ドレイク

資料⑥ｺﾞｰﾙﾃﾞﾝﾊｲﾝﾄﾞ号

資料⑦叙勲式

資料⑧ 1588 年の栄光

資料⑨アルマダ

これらはインターネット検索で得た画像と，オリジナル絵画をモティーフとした切手である。(切手になっているものは意外と多いので，いろいろ検索して活用している。)他に教科書に「世界地図の上に立つエリザベス１世」の図版があり，こちらも利用した。今回は班別ではなく，個人で取り組み周囲と相談しながら考えをまとめる作業形式なので，生徒一人一人に資料①～④(裏面は資料⑨)と資料⑤～⑧をそれぞれ A4 サイズ一枚にまとめた白黒プリント 2 枚を配布し，黒板に A3 サイズに拡大したカラー画像を貼り付けて授業を行った。

○導入　資料①②③④の提示　　(※文中の『　』内の部分は教員の発問・提示である。)

プリントを配布し，16 世紀後半に活躍する女性の肖像画として資料①②③④を提示し，『同一人物ですが，誰？』『年齢を経るに従って変わっているところ，変わらないところはどこ？』という発問をした。

☆生徒の様子・意見
　資料集に載っている写真からすぐにエリザベス１世と答えた。　絵の印象について「美白・色白」「特に 56 歳が若作り」「歳を取っているようには感じられない。」「衣装がどんどん派手になっている。小林幸子みたい。」といった率直な意見を出してくれた。

若作り，どんどん派手になっているという意見に対して『派手になっているのは，なぜか？』『なんで歳を取っているように見えないのか？』といった発問をした。

☆生徒の意見　「見栄」「絵を描く人に注文をつけた！」「女性だから老いを見せたくないから。」「贅沢が出来る余裕が出来たのでは？」
△補足説明　・確かにイギリスは豊かになっていった事実。(重商主義政策)・女王は独身であったこと。「私は国家を結婚している」という言葉　※「顔に皺と陰を入れない注文があった」という説

これらの意見と補足説明を板書をまとめた時点で『この女王に対する国民の支持はあったのか？』という問いかけをし，展開１へとつなげた。

○展開１　エリザベス１世の治世について説明をし板書した後，『では，なぜイギリスが豊かになっていったのか？』という発問をし，展開２へとつなげた。

○展開２　イギリスが豊かになったきっかけの一つの要因，私掠許可状を与えられた海賊ドレイクに関する資料⑤⑥⑦⑧を提示し，『A ⑤の人物名を資料集から探してみよう。B ⑥のゴールデンハインド号はイギリスに何をもたらしたか考えてみよう。C ⑦はエリザベスは彼に何をしているのだろう。D ⑧の 1588 年の栄光とは何か調べてみよう。』といった４つの発問をした。生徒は教科書・資料集を見ながら答えを探した。

☆生徒の意見と補足説明
A について　資料集の大航海時代のページの年表からドレイクと答える。
B について　分からない生徒が多いので，マゼラン船団が持って帰ってきたものとヒントを出す。ノートを見返してスパイスという答えを探し出す。 ※ 50 万ポンドという金額になる香辛料はイギリスの国家予算数年分と補足した。
C について　以前見せた騎士の叙勲式と似た構図であったので，何かに任命していると答える。半数以上は小さくて分からないという。※なぜ海賊が貴族になれるのか，理由を考えさせた。
D について　1588 年にアルマダ海戦に勝利したことを教科書から読み取っていた。※スペインの無敵艦隊を撃破したイギリス海軍の副提督はこのドレイクであり，スペイン船をおそっていたドレイクはスペインの弱点も熟知していたはずと補足した。

このあと，エリザベス１世の行った重商主義の説明をし，重要事項を板書した。生徒がノートを取り終えた後，海賊を活用してスペインの無敵艦隊を破ったという点をクローズアップして，展開３につなげた。

○展開３　資料⑨の提示

資料⑧はこの絵をモチーフにしている切手であることを説明し，この絵を見て気になるところを探させた。

☆生徒の意見　(絵の中の情報のみであった)
「襟巻き」「リボン」「アフロヘア」「窓の後ろの絵の違い」「王冠」「手にしている地球儀」

この意見をもとに説明を行った。『後ろの絵の左側は勝利した英艦隊，右側はスペイン無敵艦隊(アルマダ)に見えるような気がします。その後のイギリスの晴れ渡る未来。スペインの没落のイメージ。手にしている地球儀は七つの海を征する英海軍を彷彿させるものとして捉えられます。もう一枚，教科書に載っている「世界地図の上に立つエリザベス１世」の絵画と共に，女王の治世をたたえるものと受け取れないでしょうか。』と私の見解も合わせて

示し，まとめに移る。

○まとめ

エリザベス１世の業績をまとめ，提示してきた資料④⑨の年齢の割に若く美しいエリザベス１世像の真意を考えてみた。この段階ではなかなか生徒に意見が出なかったので，考え方の一つとして，私の見解を提示した。『宗教的対立をおさめ，国内産業保護を行い，植民地経営の足がかりをつくり，絶頂期のスペインを破り，対外発展の基礎を築いたエリザベス１世。「私は国家と結婚している」の言葉どおり，彼女がいつまでも若く美しく威厳に満ちている「イングランドの母」であることの記録を残しておきたかったのではないだろうか？このような絵画が後の英国民にどのように受け止められているかを考えてみてください。』

○検証

一枚の肖像画だけでは偏るので，入手できる範囲のものをすべて見せてみて，人物像に迫るとともに歴史的な事実を逆に探ってみる取り組みである。今回は個人活動中心で基礎事項を調べるのに手一杯で，なかなか意図を考える段階まで持って行くことは出来なかったのが残念である。5 回目の取り組みであり，生徒自身の考える姿勢は定着してきている。検証内容であるが，「①絵画･写真資料が語る歴史的な事実を読み取る能力をどれだけ高めることが出来るのか。」については，描かれていることを読み取る活動をほとんどの生徒が行っていて，教科書・資料集・補足説明から人物像を読み取り，事実を調べることが出来たと考える。「②読み取った事実をもとに，時代背景や事象・価値観等の理解を深める考察がどれだけ出来るか。」については，こちら側からの提示やヒントが多かった点を考えると不十分であったと考える。今後の課題として，授業で学習した知識と絵画や写真のもつ情報とをつなぎ合わせていくという形に深めていく必要があると考える。

生徒の感想(試験時に書かせたもの)に「ただ絵を眺めていただけであったが，いろいろな情報が隠れていることに気付いた。」「絵を見るのは楽しいのでもっと増やして欲しい」というものがいくつか見られた。この点で他の絵画を見た時，絵に描かれている情報を探究するきっかけになったのではないかと考える。今後は「見るのが楽しい」に加え「推理・推測することが楽しい」という意見が増えるように改善を行っていきたい。

Ｂ．絵画や写真についての調べ学習

○指導の概要

〔1 学期〕1 学期中間試験を返却した後，「絵画・写真について調べまとめるレポート」を夏季休業中に課すことを伝え，教科書の中に出てくる絵画・写真の中から気になるものを一枚ピックアップさせた。その後，エントリーシートを配布し，教科書のページ・絵画や写真の名称・選んだ理由を記入させ，提出させた。この日から，各自で書籍や VTR，インターネット等から情報を集める作業を始めさせた。なかなか資料が見つからなく変更を申し出るものが出てきたので，７月第一週まで生徒にエントリー変更を認めた。最終的に出てきたものをおおまかに分類してみると以下の通りになる。中世以降のアジア地域の絵画・写真がほとんどない状態である。情報を探すのに困っている生徒に対して 1 学期期末試験終了後に集めて，インターネットでの検索方法・図書館での検索の仕方などを教えることと，可能な限り参考文献になりそうなものについてアドバイスを行った。レポート作成にあたっては以下の条件を与えた。B4 サイズの紙・手書き・画像写真の添付(コピーで出来ればカラー)・内容(気になった理由，描かれた(撮影された)時期，作者名，絵画写真の説明と絵画から得た情報，時代背景，自分自身が考えたこと，評価などを盛り込む）といったものである。これ以

外はレイアウトも写真の追加も自主的な判断に任せた。

◎エントリー項目一覧

○古代オリエント時代の写真・「死者の書」「モーゼ」	１０名
○古代ギリシア時代の彫刻作品・アガメムノンのマスク	１３名
○古代ローマ時代の建造物の写真・壁画「アレキサンダー」	２５名
○古代中国史の写真　孔子の絵　始皇帝の絵・「兵馬俑」「唐三彩」etc	１４名
○古代アメリカの遺跡の写真　「マチュピチュ」	２名
○イスラム世界の中から　「ムハンマド」の絵画「モスクの写真」「アラベスク」	５名
○東南アジア世界の「ボロブドゥール寺院」	１名
○中世世界の絵画　「カール大帝」「ベリー公の時禱書」「死の舞踏」etc	１２名
○ルネサンス・大航海時代・宗教改革関係の絵画・写真	２６名
○絶対王政時代の君主の肖像・戦争の様子を描いたもの	８名
○アメリカの独立時代の絵「ワシントン」「星条旗」etc	４名
○フランス革命関連の絵画「バスティーユ牢獄襲撃」「ナポレオン像」etc	８名
○１９世紀の芸術家の作品・革命に関連する絵画	８名
○２０世紀前半の写真　ファッション・ヒトラー・アウシュビッツ・日中戦争 etc	７名
○２０世紀後半の写真　ガンディー　ベトナム戦争　水爆実験　9.11 事件 etc	１４名

〔2 学期〕第 1 回目の授業で提出させたが，提出率は 90 %で，未提出者には必ず提出するように再指導した。一通り目を通して第 2 週の段階で教室前廊下の掲示スペースにクラスごとに貼り付け，生徒に全部を見るよう指示し，一人５作品を選んで投票させた。

９月第３週に，各クラス上位５位に選ばれた生徒が各クラスで作品を印刷したものを配って説明する時間を１時間ずつとった。クラスの生徒の前で発表することに不慣れで，説明はたどたどしく，教員に助けを求めるような面もあったが，なんとか時間内で５人の発表を終えることが出来た。

書かれたレポートの例を以下にあげる。表現は単純だが内容的にかなり優れているものやレイアウトや写真を増やすなど工夫しているものである。

教室前に展示した様子

○生徒の様子

気にる絵画や写真をもとにさらに色々な画像を添付し詳細に調べたことを書いている生徒は意外にも半数を超えていた。以下，生徒にとった簡単なアンケートの内容を簡単に記す。

◎アンケートより

ア．十分に時間をかけて調べた生徒が６割強。

イ．調べるにあたって使った資料は図書館の本・インターネット(ウィキペディアの利用が多い)・授業中に使う資料集がほとんどであった。

ウ．苦労した点は文章にすること，レイアウト，時代背景を調べること，どう書いたらいいか迷うといったところであった。

エ．用紙サイズについては「ちょうどいい」が７割であった。（１割は模造紙でもいいという。）

オ．このようなレポートを書いたことがある生徒は３割弱であった。初めての生徒は５割を超えた。

カ．感想・意見は「調べてみていろいろ分かって面白かった。」「当時の様子が分かり良かった。」「評価とか価値を考えるのは難しい。」「面倒くさかった。」「適当にやってしまったが，人と見比べてもっと調べればよかったと思う。」「もっと工夫すればよかった。」「今までこんな形でレポートを掲示されたことがなく，緊張したが見てもらえてよかった。」と色々なことが書かれていが，おおむね「もっと頑張ればよかった」「やってよかった」という肯定的なものが多かった。

※発表した生徒は「緊張した。」「書くのはいいけど，説明するのは苦手です。」「もうやりたくない。」と消極的な感想が多かった。

○検証

レポート作成にあたり指導者側が指導する場面は極めて少なく，自分で選んだ主題について生徒自身が考えて答えを出すことが出来ていた。また夏季休業中の課題がメインだったので，授業の進度を気にせず進めることが出来た。はじめる前はレポートの出来に不安を抱えていたが，予想以上に生徒が意欲的に取り組み，内容的にも個性的なものが多い。検証内容であるが，「①絵画･写真資料が語る歴史的な事実を読み取る能力をどれだけ高めることが出来るのか。」については，自分自身で読み取る努力をした跡が生徒の作成したレポートから読み取ることが出来た。年間指導計画の中に適切に位置づけ実践することにより，さらに読み取る能力を高めることが出来ると考える。「②読み取った事実をもとに時代背景や事象・価値観等の理解を深める考察がどれだけ出来るか。」については，調べた資料等に頼ったものが多いが，考えを選択してまとめることは出来ていた。レポート内容はまだまだ不十分なものが多々見られたが，初めての生徒が多いことを考えると努力のあとが見られる。「見たことのある絵が，たんに芸術作品というだけでなく，当時の人々へのメッセージや社会への批判をこめているものだと分かった」という感想をもった生徒もいた。今までの授業では教員が一方的に説明してしまうことが多かったが，自発的な学習により生徒自身が実感をもって理解した一つの事例である。このようなレポートを作成する学習が生徒の考える力を伸ばす上で大きな意義を持つとともに，更に機会を設ける必要があると実感した。

５　まとめ・展望

○ A．絵画や写真についての話し合い，発表の学習 について

生徒自身でいろいろ考える力はあるがそれを発表する機会を設けてこなかったので，1 学期の実践や授業中のやりとりの中で意見を言いやすい雰囲気づくりを行った。（班を組ませて話し合いの時間を取り意見を集約して発表させる活動。）進度を考えるとほとんど時間をとれなかった作業だが，授業内容を詰めてでもやる必要があると考える。資料を提示するにあたっては，まずは教員である前に個人として見て，あっと驚くものを探した。しかし，生徒にとってはそれだけでは不十分で，視線が一瞬にして集まるインパクトのある作品や全体

を見て，更に細かくディティールを見て何かを発見できるものを選ぶ必要を感じる。資料の提示方法は資料を一度に全部を見せるのではなく，展開に従って資料を提示していく方が生徒の反応が良かったので，余裕がある限り小出しに見せていくべきだと考える。今回の実践⑤では，１クラスあたり８枚，カラー印刷資料を用意し班ごとに配布した。紙とカラーインクに余裕がないと出来ないので，「プレゼンテーションソフトで映写し，プリントで補う」という形が現状では望ましい。

生徒の反応については，普段の講義形式のものよりも良く，事後指導はノートに意見や感想を書かせ，ノートチェックの際に読んで講評や補足を行った。出来れば実践を行った直後に感想等をチェックする必要性を感じた。

考える力を伸ばす授業実践という表題で行った実践であるが，まだまだ試行錯誤の段階であり，工夫の余地は多分にある。年間指導計画の中にもっとこの手法を組み込み，多くの授業実践例を参考にしながら様々な場面で絵画・音楽・文学作品といった資料を活用して歴史的事実を生徒に探らせていきたい。

○ B．絵画や写真についての調べ学習について

進度を考えると，このような取り組みを後回しにしてきたが，生徒には調べる力やまとめる力が十分あることを実感できた。生徒のスキル(調べる力やまとめる力)をより高めるためにも，このような取り組みを増やしていく必要があると考える。長期休業中に課したので授業進度をあまり気にしなくてよかった点と，生徒自身が大変だけど調べて面白かったという率直な感想をもってくれた点も良かったと考える。何よりも自分自身が気になったものを調べるということが，調べ学習の一番の基本になるので，生徒にこのような機会を普段の授業の中でもっと設定していく必要がある。

○ A の実践と B の実践の関連づけと展望

二つの実践を行ったが，基本的に考える力を伸ばすガイドになるのが A の実践であり，その成果を活かす機会が B の実践になる。今回は夏季休業中のレポート作成の成果を活かし，２学期の授業実践で考える能力を高めることができた。冬季休業と３学期の授業を利用し，B の実践を行うならば，年間を通してさらに踏み込んだ形の調べ学習を行うことができる。新学習指導要領の世界史 B の３ 内容の取り扱い(１)全体にわたる配慮事項の中に「イ．年表，地図その他の資料を積極的に活用したり，文化遺産，博物館や資料館の調査・見学を取り入れたりするなどして，具体的に学ばせるように工夫すること。」とあり，今後の学習指導においても特に B の実践のレポート作成のような取り組みが重視されるようになってきている。次年度以降もこの視点に立ち，より効果的な指導計画を構築したい。今回の取り組みを踏まえ，今後，生徒に「様々な物事の歴史的な背景や意義を考える意欲・関心・態度」を高めることができる授業を模索していこうと考え，本稿を閉じます。

最後に今回，自分のこれまでの授業を振り返る機会をいただけたことと，なかなか研究の方向性が見いだせない私に丁寧な指導をして下さった先生方に感謝申し上げます。

参考文献

・『授業が変わる世界史教育法』鳥山孟郎著　(青木書店)
・『歴史教育と歴史学』安田元久監修(山川出版社)
・『世界の歴史 16　ルネサンスと地中海』樺山紘一著(中央公論社)
・『世界の歴史 17　ヨーロッパ近世の開花』長谷川輝夫/大久保桂子/土肥恒之著(中央公論社)
・『興亡の世界史 13　近代ヨーロッパの覇権』福井憲彦著(講談社)
・本文中に使用している絵画の画像はインターネット上の Wikipedia からダウンロードしたものである。